

▶「各国のアナーキストと文通したし」

誤解を恐れずに言えば、残念ながらアナキズムは今日、すたれてるように見えます。1960年代の半ばごろ、私も少しばかり日本アナキスト連盟が主催する会合に出入りしたことがありました。しかしその連盟もとっくに解散しました。しかし、アナキズムの思想は決して滅びることはない、と私は考えています。現に6年ほど前、「日本で最も自由だった男」というサブタイトルで、大杉栄を丸ごと1冊特集した本があり、今なお少数の人々の間で大杉は、光り輝いている存在です。

とは言え戦前は、マルキシズムとともに反体制思想として人々の間に浸透していたアナキズムはとりわけ危険思想として、その信奉者には官憲の厳しい目が張り付いていました。山鹿は大杉から、「当分はおとなしく隠れて本を読め」という忠告もあり、京都の家に戻り、集めたアナキズム文献を連日熟読していました。

一方、以前から考えていた外国のエスペラント雑誌に「各国のアナーキストと文通したし」という広告を出しました。この広告は、世界の一部にしか知られていなかった日本のアナキズム運動が極東の小国に存在することを世界に直接知らせる効果があり、特筆に値するものでした。山鹿が以後、海外に積極的に入る大きな契機でもありました。

この広告に対してすぐにペトロブというロシア人がペテルブルグから、「君の“イデオ”について知らせろ」という反応がありました。

山鹿は当時のことをこう回想しています。「そのイデオは辞書にはただ観念と訳してあるだけで、中学一年中退の私には、カンネンという日本語が何のことか、まるでわからなかった。当時は

まだ、思想という言葉が一般化していなかった。観念一心を観る、だから千里眼の一種かなどと、あれこれ悩んだ・・・」と記しています。

▶電気工として中国の大連へ

貧弱な知識しかない山鹿でしたが、アナキズムの本などを一心に読みふけりました。そうして真夜中にそっと家を出て、南禅寺の山門や同志社の講堂などに、幸徳秋水が『自由思想』に書いた創刊の辞を白墨で書きなぐって歩いたのです。

筆跡を写真に撮った警察は山鹿の身辺を監視し始めました。海外からも広告の効果があり、続々と手紙が送られてきました。警察の眼が厳しくなり、家人たちも気づきだし、部屋に閉じ込められて見張りつきの監禁状態になってしまいました。

山鹿はこんな日本にいるより、無銭旅行でヨーロッパへ行こうと思い立ちました。エスペラントの文通のお蔭で各国に知己もありました。しかし生活して行くためには、印刷技術以外に新たな技術を身につけようと、当時の新技術と言われた電気技術を勉強し始めたのです。

たまたま満鉄に赴任する知人に頼みこみ、大連発電所で働く口を見つけ、中国の大連へ旅立ちました。

山鹿は満鉄大連発電所で働きながら、夜学に通って更に電気工学と中国語を勉強しました。エスペラントを学ぶこと

によって英語もいつしかわかるようになり、後には(1925年)『日・エス・支・英会話と辞書』という本を刊行するほどの実力を身につけました。

▶中国アナキズム運動との連携

1912年(大正元年)10月、大杉栄、荒畑寒村らは『近代思想』を創刊し、新たな一步を踏み出しました。その大杉から山鹿に、「中国の同志師復が

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」
第二〇回 中国の大連に飛び立つ 山鹿泰治Ⅱ

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おもしろいよしひろ)

上海に潜入し、エス漢併用のアナキズム運動誌『民声』を週刊で出し始めている。応援に行かないか』という手紙が来ました。1914年の3月です。

山鹿は大連から少しでもヨーロッパに近づこうと思っていた矢先でした。決断と行動力抜群の山鹿はすぐこの話に乗り、技師長の机に辞表をおいて宿に戻り、トランクひとつで奉天(現瀋陽)、旅順を見物後、大連港から上海航路の船に乗り込みました。そうして上海で師復に出会うのです。

中国のアナキズム運動は1900年代に入り、当時の中国政府がパリと東京に送り出した留学生の中から起こりました。パリの中国人留学生らは『新世紀』を発行し、世界中の中国人留学生らにアナキズムの思想と運動で大きな影響を与えました。

一方東京では、大杉が日本で最初のエスペラント学校を開講しましたが、その中に中国人留学生らがいまいました。その中心人物が張継です。彼は1899年来日し、1905年には孫文の同盟会結成と同時にそれに参加し、また早稲田で学びつつ、徐々にアナキズムに傾倒するようになりました。

1914年8月、上海の師復の民声社で働いていた山鹿に大杉から手紙が来ました。

『『近代思想』をやめ、いよいよ『平民新聞』を出す。帰って来て手伝わないか』と言うのです。山鹿は師復に相談しましたところ、師復は「我々の方は何とかなる。中国と日本の同志がいよいよ連合を密にすることによって共に力は倍加する。君は帰国して活動するのが当然だ」と言いました。

その頃の師復は『民声』を一号発行するたびに寝込むほど体が弱っていました。そして1914年9月に東京に戻った山鹿は師復の死を知るのです。

➤ 盲目の詩人、エロシェンコの来日

山鹿は大杉の月刊『平民新聞』発行を手伝いますが官憲は厳しく、発禁処分が続くなど苦闘しましたが、山鹿は廃刊になった平民新聞を秘密に出版したりしましたが、状況が動くことはありません。「もうこんな状況では、いっそテロリズムで現状を打開する以外にない」と思うようになり、短刀や

芝居で使ったらしい六連発の銃などを手に入れましたが、大杉に見つかりました。

大杉は驚き、「幸徳事件では、思わぬことからデッチ上げられた。そのためにどんな大きな迫害が起こり、運動が立ち遅れたか、それを考えると単純な盲動は、政府を喜ばせることになる。一人二人のテロリストで革命が始まるわけではない。今はその時代ではない」と山鹿を諷めました。当初、山鹿は不服でしたが、最後は納得し、そのような計画は放棄しました。

その頃、正確には1914年、ロシアから盲目の詩人でエスペランティストのエロシェンコが来日しました。日本では盲人が按摩師として自立して生きている、と聞いて来日したのでした。その頃の日本のエスペラント運動は、「エスペラントを学ぶのはエスペラントを発展させるためにのみ運動するのだ」という派と、「エスペラントを用いて人類社会の解放を達成するためだ」という派に大きく意見が分かれていました。山鹿もエロシェンコも、もちろん後者でした。

エロシェンコは、劇作家の秋田雨雀と知り合い、その関係で望月百合子、神近市子、相馬黒光、大杉栄らと知り合うようになりました。

➤ 北一輝と出会う

山鹿はエロシェンコが大杉の仲間たちと話すときは、エスペラントで通訳をしましたが、官憲の監視は続いていました。エスペラント界の重鎮である黒板勝美のところ半年ばかり書生代わりに居候をしていた時、山鹿を尾行する刑事・秋葉喜作が、青山南町に北一輝がいることを教えてくれました。北は国家社会主義者としてその名は広く知れ亘っていました。山鹿は暇つぶしに北の家に出かけました。

北は1883年、新潟県の佐渡に生まれ、処女作『国体論及び純正社会主義』を刊行しました。その著作は、大日本帝国憲法における天皇制を批判した書です。北は口髭をたくわえ、中国の大人のような支那服を着て山鹿の前に現れました。(続く)